

う超越の三類型を設定している。「大規模な超越」とは、日常生活世界から見たその他の現実世界（意味領域）の「超越」を指すもので、多元的現実論を基礎に設けられた概念である。

「中規模な超越」は、自己の経験に対する他者の存在や経験について、「小規模な超越」は、「経験の核」に対するその地平のように、ひとつの経験の内的構造について言われる概念である。「自然的態度の構成的現象学」を標榜し、超越論的な次元の問題をそれ自体としては追究しなかったシュッツであるが、ここでは「大規模な超越」から「中規模な超越」、さらには「小規模な超越」へと向かうにつれ、経験の超越論的分析に近づき、足を踏み入れていく格好となっている。

ルックマンは、このシュッツの議論を援用し、近現代社会における宗教において、それが扱う主題が「大規模な超越」から「中規模な超越」、さらには「小規模な超越」へと転換してきていると論じている。もともと、宗教の私事化論に寄せたルックマンによる援用には、もとのシュッツの議論との違いが小さい。特に、シュッツが人間経験の一般的条件について論じた「小規模な超越」を、ルックマンは「近現代的独我論」としての個人主義的諸表象の問題として捉えている。

しかし、そうした違いはあるにしても、両者の理論を比較検討する中で、現象学的な視点と、宗教の私事化現象との間に一種の平行関係があることが気づかれる。ルックマンによる宗教の私事化論は、シュッツの現象学的な視点を持ち込むことによって、近現代における宗教状況の一面を明らかにしたものであるが、同時にまたそれだけではなく、現象学に代表される、

自己の経験の一般的構造を主題とする知の様式が求められ、姿を現してきた歴史的・社会的条件を、宗教史との関連から論じるものとして解釈しなおすことができるように思われる。

こうした解釈は、翻って、いわゆるスピリチュアリティに関する諸現象を含め、私事化した「見えない宗教」の現れが、単なる社会諸制度の分化の問題や、歴史的に特殊な個人主義的表象の問題に尽きるものではないこと、人間経験の一般的構造に対するアプローチの展開を含んでいることを理論的に示唆するものである。

宗教とグローバル化

——ウルリッヒ・ベックの世俗化論——

上村 岳 生

近代化につれて宗教は消滅していく、というようにいわばゼロサム・ゲームとしての「世俗化」の前提は説得力を失いつつある。現代ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックもまた、このような従来の「世俗化」テーゼの批判者である。

ベックは世俗化を、宗教が個人化すると同時に国家や地域といった文脈から解放されていく過程であると論じている。その過程において、宗教（制度）と宗教性（信仰）は乖離していき、「自分の神（der eigene Gott）」と彼が呼ぶものへと宗教は変容する。それは決して宗教の衰退でも自閉でもなく、グロ

第17部会

ーバル化した世界において新たな連帯を生み出す可能性を秘めたものである。そしてこのようなベックの宗教論は、「宗教間の寛容はいかにして可能か」という問いに対する回答の試みでもある。このベックの議論を特にその国家論に注目しながら考察する。

ベックの主張の骨子はこうである。グローバル化社会の条件によつて国民国家という枠組みが相対化され、その枠組みのなかで構築されてきた制度や組織の一つである「宗教」も変容している。その変容は、むしろ国家によつてゆがめられていた宗教本来の可能性を解放し、国家を越えた新たな連帯の可能性を開くということでもある。

ベックの世俗化論の特徴をまとめると次のようになるだろう。

- (1) 宗教が国家の枠組みから解放されることに積極的な意義を見出す。
- (2) 世俗化諸局面を「再帰的近代化」の枠組みで統一的に論じる。

- (3) 複合性 (multiplicity) の強調。一方向的、二者択一的な世俗化論の批判。

- (4) 新たな連帯を志向した実践性。

ベックは自分の議論が欧米の文脈に限定されたものであることは認めている。一方で、「アジアの混交宗教は、『自分の神』の補完と修正となる」ということも述べている。いずれにせよ、グローバル化・コスモポリタン化という理論的前提がある以上、ベックの議論の射程に入るのは切り離された一つの社会

や宗教ではなく、世界社会における国家と宗教の関係となる。宗教は本来国民国家の枠組みに収まらない性質のものであるという主張は、欧米の文脈に限ることではない。ベックの議論は極めて楽観的ではあるが、宗教に積極的な現代的意義を見出し、その将来的なヴィジョンを具体的に提示するものとして、評価することができだろう。

宗教と博覧の近代史

——社会貢献の視点から——

濱田 陽

博覧会を、地域、国、世界の文化や文明の発展をめざして企画された文化装置とすれば、宗教がそこにいかに関わってきたのかをみることで、社会貢献の新たな可能性を考察できるのではないだろうか。日本の宗教と博覧の近代史を振り返ってみよう。

日本初の博覧会といわれる京都博覧会（一八七二）は西本願寺大書院で開かれている。第一回内国勸業博覧会（一八七七）までの三〇博覧会のうち一四が寺院と神社で開催された。近代的公園整備の前に、宗教は博覧会に場を提供したのである。また、明治政府が公式参加した欧米の万国博では鎌倉大仏や平等院鳳凰堂などが再現され、イメージ戦略として日本の宗教文化を押し出している。